

帰国 JICA 海外協力隊員 5 名に対する感謝の言葉 (7 月 31 日)

マラウイでの JICA 海外協力隊としての 2 年間の活動お疲れさまでした。本日は最終報告会において帰国される 5 名の皆様の最終プレゼンテーションを聞かせて頂きました。現場ならではの発見や示唆に溢れた大変貴重な報告会でした。皆様は、小学校教育、看護師、青少年活動、環境教育、障害児・者支援と分野は違いますが、誠実且つ真摯に体当たりで取り組まれた様子を知り、大きな感銘を受けました。

共通していたのは、様々な課題に着面し、悩みや葛藤があったということでした。悩んで悩み抜いて、支援とは何か、人が幸せに生きることをどう支えることができるかという根本的な問いを掘り下げて考え、ひとつひとつ乗り越えながら前に進まれました。

そんな誠実で真摯な姿勢、相手をリスペクトしてオーナーシップを高めながら一緒に取り組もうとする姿は、マラウイの方々に深い印象を与えたものと確信します。

今年、JICA 海外協力隊のマラウイ派遣開始から 55 年になりますが、マラウイの関係者の中には隊員に学んだ方々が何人もいます。例えば、ローザ・ムビリズィ農業大臣は、12～16 才の時、ブランタイヤのステラマリスという中学校で高橋先生に数学を教わったそうです。大臣は、思い出しながら日本語で歌を歌ってくれました。「いつまでも絶えることなく友達でいよう。今日の日よ、さようならまた会う日まで」と。30 年以上も経っているのに、ひとつことも間違わずに歌い、最後は面談に参加した日本人全員で合唱してしまいました。きっと中学校で繰り返し練習し、高橋先生が離任された後も大切な思い出となって口ずさんでいたに違いありません。また、ジーン・マタンガ・エネルギー大臣も隊員に数学を教わり、「今自分があるのは日本のおかげだ」と言ってくれています。

これは決して社交辞令だとは思えません。大臣達は、日本の隊員にめぐりあい、直接指導を受けたことを嬉しそうに誇らしく語っています。皆様が現場で関わった方々、子供たち達も、今後も皆様のことを忘れることがないと思います。そしてローザ大臣のように、残した足跡から芽を出し、社会に大きな貢献をする人材も出てくるでしょう。

報告会は、現場ならではの示唆に溢れていました。それぞれ、主役であるコミュニティの方々により沿いながら、良さを引き出そうと努力をされてきたことが良くわかり、とても印象的でした。皆様の逞しい前向きなパワーと真摯な姿勢に深い敬意を表します。

日本の便利な生活とは正反対の厳しい生活環境ではありましたが、皆様の安全で健康な任務終了に安堵しています。ボランティア調整員、健康管理員をはじめ JICA マラウイ事務所の皆様の不断の努力と配慮の賜物であり、心より御礼を申し上げます。

皆様の離任にあたり、達成感、寂しさなど、とてもひとことで表せない万感の想いがあると思います。ですが、終わりははじまりです。今回の JICA 海外協力隊マラウイ隊員という舞台はこれで幕を閉じますが、次なるチャプターのはじまりです。誇るべき凱旋帰国のあとにはじまる大切な門出でもあります。

そこで後ほど、小さなダルマを進呈します。着任する隊員の方々には、片目を入れ抱負を書いて頂いています。帰任される皆様には、よろしければ今の達成感とともにマラウイ隊員として刻みたいことば、報告会に溢れていた今後も忘れたくないひとことをダルマのうしろに書いてそばにおいて頂ければ嬉しく思います。

皆様はそれぞれの道を歩むことになります。大学院で勉強される方、新しい職場にチャレンジされる方。他の国で活動される方、マラウイに戻ってこられる方もおられると思います。日本に戻って、マラウイのこと、the Warm Heart of Africa の真の意味を、また、日本人が人間としての前向きな生き方を学べる国であることなどを伝えて下さい。皆様がマラウイでの経験を活かして、日本や世界で活躍されるのを応援しています。

マラウイで隊員として活動した経験は、おそらく一生の宝になることと思います。今後の活動やキャリアにとって役に立つ知見であることは間違いありませんが、何よりも人間としての生き方、妥協のない今後の自分自身の人生の羅針盤になるかもしれません。

そして皆様のかいた汗の分だけ、流した涙の分だけ、マラウイと日本の距離は確実に近づきました。そのことは皆さんがいま実感されていることだと思います。それぞれの現場で体当たりで情熱を注ぎ、日本とマラウイの間の友情を一層深めて頂いたことにつき、心より感謝を申し上げます。

2年間、本当にお疲れ様でした。

(了)